メインフォーラム ②「『山の辺の道』沿いの里・山資本と活かした地域づくり」

日時　2016 年 11 月 27 日（日）　10 時～12 時

場所　天理市文化センター

前回のメインフォーラム（2014 年）では、奈良市長、天理市長、桜井市長という「山の辺の道」沿いの 3 市長に、「山の辺の道」という“里山資本”をどのように活かしたらいいのか、という総論・総花的な議論に終始した。そして、井上氏からは“里山資本”の活かし方について適切なアドバイスを受けることができた。

今回は、井上氏が激動の時代だからこそ“里山資本”の活用が重要なのだとの視点から基調講演をおこない、その後で並河健天理市長と対談し、天理市における“里山資本”を具体的にそのように地域づくりに活かしたら良いのかを、並河氏は具体的事例にスライドを用いて紹介し、これにについて議論を深めた。

特に、前回はいわゆる“里山資本”そのものについてだったが、今回は“里”すなわち「人間環境」の地域と、“山”すなわち「自然環境」の地域とのより良い関係・共存を、““資本”の観点から考えてみようという企画で、「里・山資本を活かした地域づくり」というテーマになった。

このフォーラムでは、天理市内の“里山資本”を“里”と“山”の資本をどのように活かせば良いのか、という天理市内のまだあまり活かされていない資本について、基調講演と対談のなかでさまざまな話題について議論した。最初に、前回のメインフォーラムでも基調講演をした NHK エンタープライズ・エグゼクティブプロデューサー（前職：NHK チーフ・プロデューサー）の井上恭介氏が基調講演をおこない、それを受けて井上氏と並河健天理市長との二人の対談がおこなわれた。参加者は 107 名で、参加者との質疑応答もおこなわれた。

以下はその内容である。

基調講演　　激動の時代　里山資本主義の出番がやってきた

井上恭介氏（ＮＨＫエンタープライズ　エグゼクティブ・プロデューサー）

① 強欲型グローバル経済に疲労困憊（グローバリズム・ファティーグ）

・トランプ勝利をどう見るか

② マネー資本主義から里山資本主義へ

・2008 年 8 月、リーマンショックの衝撃

・なぜ起きた？摩訶不思議な金融危機

・突然機能不全に陥る、一見完璧な「巨大システム」

・2011 年、エネルギーの巨大システム破綻後に、広島へ

③　里山資本主義がかかげる「価値のあとさきを元へ戻す」「ベクトル見直し」

・「売り上げ」至上主義から、「支出」見直しへ

・お金第一か、豊かさ・幸せ第一か

・目の前にあるのに活用できていない資源、使える資源を捨てている！

・「量の経済・低価格競争」から「ビンテージ競争」へ

④　里山資本主義から「里海」「里川」へ

・赤潮の海、瀕死の海から回復した瀬戸内海

・「経済」と「環境」が背を向け合っていた高度経済成長時代

・人と自然が持ちつ持たれつ、日本人に保存された「縄文の生き方」

対　談　　井上恭介氏

並河 健 氏（天理市長）

司会・進行　　佐藤孝則（NPO 法人 環境市民ネットワーク天理理事長）

対談した井上恭介氏（左）と並河健氏（右）。

○井上恭介氏（以降、井上）

・２年ぶりに天理へ来て、美しいイチョウ並木の写真や記事を拝見した。自慢できるイチョウ並木があることはほんとうに良いこと。しかも落葉を堆肥にするという知恵と工夫の循環システムは、一番の価値。実は循環システムが整った景観や観光、まちづくりは、最大の価値があると思う。

○並河健氏（以降、並河）

・落葉かきをはじめ、いろいろな取組みを熱心にやっているというお褒めのお言葉、ありがとうございます。

・(会場の皆さまに) 質問ですが、福住の食べられるほおずきの実「道安宝珠喜（どうあんほおずき）」や和爾のマコモタケを知っている方、聞いたことのある方は(会場に)どのくらいいらっしゃいますか？　ありがとうございます。意識が非常に高いですね、という会場への問いかけと反応に続いて、以下の内容のスライドを紹介し。

・「サトの豊かさ」と「マチの魅力」を合わせ持つまち「天理市」

《天理市まち・ひと・しごと創生総合戦略》

(1). 地域資源と新しい技術・多様な働き方を融合し、安心・充実して働ける場を創出する

① 市民農園や柿の木オーナー制度や柿の葉の活用など耕作放棄地解消に向けた取り組みを実施。

② 天理マルシェや柳本や櫟本等での地域主導のマルシェの取組を観光や文化振興と組み合わせ農産品情報の発信の機会とし、ブランド農産品や６次産品の育成、販路拡大。

③ 時間や場所に捉われないテレワーク等により「柔軟な働き方」を提案。

(2). 天理ならではの魅力を活かし、新しい人の流れを作る

① 天理市を京阪神都市部の外縁部と低く評価するのでなく、これまで育まれてきた天理の魅力を再認識し、天理で暮らすこと、訪れることの「豊かさ」や「価値」は何かを可視化し、伝え、経済効果に繋げる。

② 山の辺の道を基軸として、農業やトレッキング、サイクリングなどを組み合わせた収容観光の促進を図る。

(3). 子どもを産み育てたい人の希望が叶う、選ばれるまちになる

① 地域資源を活かした豊かな教育、地域参加による学校づくりを進め、天理で育つことに固有の価値を付与するとともに、子ども達との交わりを通じて希薄化する地域の絆を回復し、高齢者も含めた地域の元気を取り戻す相乗効果を生み出す。

(4). 垣根を越えた連携・協働で、暮らしやすく、住み続けたいまちをつくる

① 健康寿命の延伸、医療と介護が連携した地域包括ケアの推進、防災や地域公共交通をはじめとする、誰もが安心して暮らし続けることができる街づくりを行う。

② 環境保全を含めた持続可能なゴミ処理体制の確立を行政だけでなく地域住民との協働や市町村の行政区分を超えた連携のもとで実施する。

・特に、天理市は６次産品を全国に打って出るため、いろいろなものの PR やものづくりプロデューサーとして活躍されている服部滋樹氏とプロジェクトを組んでいる。櫟本でアロエを育てている企業との商品開発、南檜垣営農組合さんとの耕作放棄地の活用を図っている。なかでも、中華の高級食材であるマコモタケは、ネット販売でもいち早く完売するヒット商品になった。

○井上

・先ほど、市長さんは「持続可能な」という言葉を使われた。これはものすごく基本的なことで、重要なことです。これは、基調講演のなかで申し上げた、近代以降、資本主義が始まって以降の人類が豊かになるためにやってきた経済成長とは相反すること。つまり、米作のように、毎年同じ量が再生産されるしくみで、水平に繋がっていく持続可能なシステム。ところが、今の経済、世界の豊かさの目指し方は、らせん階段をいつまでも昇り続けていくしくみで、１周しても元の場所に帰ってこない。その分、地球に負担をかけていることになる。たとえば、牛肉需要の増大とともに森林を伐採し、飼料用大豆の耕作地拡大をつづけるしくみと同じである。

・市長がスライド説明の中で仰った耕作放棄地の活用、柿の葉を採りましょう、景観としても良いですねという感覚が、むしろ持続可能型。そのような頭のスイッチの切換えこそ、今の社会では必要なのではないか。

○並河
・消費してすぐ捨てるスタイルから、本当に良いものをずっと使い続けていくことが大事だという意識に切り替わらないといけない。こういう意識に切り替えていかないと、「里山資本主義」と言いつつも、一方で「マネー資本主義」と棲み分けたり、あるいは価値観をずらしたりする現実。いかし、いずれ同じ土俵で戦わねばならないことも考えなければならない。

○井上
・今すごく大事なことを仰った。２年前のフォーラムで天理に来た時、控室ですごくおいしい柿の葉寿司を頂戴した。ちゃんとした柿の葉に包まれていて、ものすごく美味しかった。単なる殺菌効果だけでなく独特の香りがした。今の資本主義の大量生産、低コストで生産される見た目は同じような柿の葉寿司と、控室で食べた香りと美味しさを兼ね備えた柿の葉寿司との違いのようである。
・大量生産されていても、ビンテージもののジーンズやワインのように、高級品も併せて存在する。付加価値のついた商品ほどストーリーがあり、本物となる。

○並河
・天理市がなぜクリエーターの服部滋樹氏と組んだかというと、それぞれがもつ価値の伝え方、表現方法が秀でているから。